

マラソン大会による地域活性化と課題について ～冬の大和路を駆け抜ける「奈良マラソン」～

1 はじめに

2007年にスタートした「東京マラソン」を契機として、マラソン大会の開催がブームとなっている。2010年には「奈良マラソン」、2011年には「大阪マラソン」と「神戸マラソン」、2012年には「京都マラソン」と「名古屋マラソン」が始まった。また、こうしたブームは、全国各地に波及している。

市民マラソンは、健康意識の高まりや手軽にできる身近なスポーツとして注目されている。また地域振興策の一つとして、マラソン大会を開催する動きも地方で広がっている。マラソンは、全国から多くのランナーを集め、消費を促し、地域活性化につながると考えられている。

数あるマラソン大会の中で、全国や海外からも注目されている「奈良マラソン」の概要を紹介するとともに今後のマラソン大会による地域活性化と課題を考察する。

2 余暇活動におけるマラソンの動向

1. 手軽に楽しめる人気のマラソン

近年、運動不足による病気が増加していることから、健康を維持するためにスポーツをする人が増えている。また高齢社会が加速しているわが国において、健康に対する意識の高い人が多くなっ

てきている。健康を維持するために、老若男女を問わず1人でも気軽に行えるスポーツとして、ジョギング、マラソンは人気が高い。

「2014 レジャー白書」の余暇活動への参加実態の調査（2013年）によれば、スポーツ部門では、「ジョギング、マラソン」が最も参加人口が多い（図表1）。年間の平均費用も8千円と手頃で、身近なスポーツであることがうかがえ、国民の健康意識が高まる中、マラソンをライフスタイルの一部としている人も多い。

性別の余暇活動のスポーツ参加率（2014 レジャー白書）は、「ジョギング、マラソン」は、男性では2007年以降、常に1位で、女性では2006年以降、体操（器具を使わないもの）に続き2位をキープしている（図表2）。

2. 種目別運動・スポーツ実施状況

「スポーツ白書2014」による運動・スポーツの種目別実施率（過去1年間に1回以上実施した上位10種目）の推移（図表3）は、2004年以降、「散歩（ぶらぶら歩き）」「ウォーキング」「体操（軽い体操、ラジオ体操など）」「ボウリング」が上位4種目となっている。次いで「筋力トレーニング」「ゴルフ（コース、練習場）」「釣り」などが10位以内に入っている。全体的に健康づくりのための運動や個人でできる種目が上位を占める

図表1 スポーツ部門における余暇活動の参加・消費の実態（2013年）

順位	競技種目	参加人口 (万人)	参加率 (%)	年間平均活動回数 (回)	年間平均費用(千円)			1回当たり費用 (円)
					用具等	会費等	合計	
1	ジョギング、マラソン	2,080	20.5	35.7	4.5	3.5	8.0	220
2	体操(器具を使わないもの)	1,850	18.2	47.9	2.0	3.7	5.6	120
3	トレーニング	1,290	12.7	49.1	8.4	17.1	25.5	520
4	ボウリング	1,220	12.0	4.9	3.4	4.2	7.6	1,550
5	水泳(プールでの)	1,200	11.8	24.6	9.8	14.1	23.9	970
6	ゴルフ(練習場除くコースのみ)	860	8.5	13.5	57.2	77.2	134.3	9,950
7	サイクリング、サイクルスポーツ	840	8.3	28.0	19.6	2.7	22.3	800
8	釣り	770	7.6	9.9	19.3	16.4	35.7	3,610
9	キャッチボール、野球	690	6.8	12.7	3.3	1.9	5.3	420
10	卓球	660	6.5	13.0	4.5	2.6	7.1	550
10	バドミントン	660	6.5	11.7	3.0	2.3	5.3	450

資料 「2014 レジャー白書」より当研究所にて作成

図表2 主なスポーツの余暇活動の性別参加率の推移

(単位:%)

競技種目	男性									女性								
	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013		
ジョギング、マラソン	26.8	24.9	28.0	34.4	31.7	32.5	31.9	27.1	17.0	16.5	18.4	20.7	19.1	18.2	16.4	14.1		
体操(器具を使わないもの)	15.7	14.5	16.1	23.7	23.1	21.7	18.2	15.5	22.0	24.1	24.1	33.7	28.6	31.3	26.3	20.9		
トレーニング	15.2	15.0	15.3	24.0	22.9	21.4	19.7	17.1	8.0	11.1	8.7	14.1	13.5	12.1	11.7	8.5		
ボウリング	27.2	24.1	24.7	25.5	20.5	19.4	17.3	15.3	18.6	21.4	18.1	17.9	14.5	13.6	11.1	8.9		
水泳(プールでの)	13.8	13.5	12.5	15.5	14.4	11.6	11.1	11.7	15.3	14.5	13.6	16.0	13.2	13.6	12.1	12.0		
ゴルフ(練習場除くコースのみ)	14.9	12.6	15.9	15.9	13.1	12.1	12.8	14.2	1.7	2.6	1.7	3.3	3.1	3.5	3.1	2.9		
サイクリング、サイクルスポーツ	9.2	10.8	10.3	20.5	18.4	15.0	14.3	12.7	6.6	7.4	6.9	9.3	8.6	8.7	7.1	4.1		
釣り	20.8	16.4	15.6	15.4	14.1	13.8	12.8	12.2	3.3	4.6	4.9	5.3	4.6	4.5	3.2	3.1		
キャッチボール、野球	17.6	15.9	18.3	17.9	14.6	12.0	12.5	11.4	4.7	4.8	4.8	4.3	3.8	3.9	2.6	2.5		
卓球	7.4	7.2	7.2	10.4	8.8	8.8	7.9	6.8	6.9	5.3	7.4	9.9	8.1	7.7	8.2	6.1		
バドミントン	7.8	6.0	6.6	9.8	7.3	6.9	5.6	6.3	8.9	7.4	9.9	10.5	10.0	9.3	7.5	6.7		

資料 「2014 レジャー白書」より当研究所にて作成(参加率は年1回以上おこなった人)

図表3 種目別運動・スポーツ実施率の動向(上位10種目)

(単位:%)

順位	2004年	2006年	2008年	2010年	2012年
1	散歩(ぶらぶら歩き) 34.0	散歩(ぶらぶら歩き) 29.2	散歩(ぶらぶら歩き) 30.8	散歩(ぶらぶら歩き) 34.8	散歩(ぶらぶら歩き) 34.9
2	ウォーキング 21.6	ウォーキング 19.7	ウォーキング 22.4	ウォーキング 24.5	ウォーキング 25.0
3	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 18.6	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 16.1	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 17.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 18.5	体操(軽い体操・ラジオ体操など) 20.5
4	ボウリング 16.4	ボウリング 14.8	ボウリング 15.1	ボウリング 13.3	ボウリング 13.0
5	筋力トレーニング 9.6	筋力トレーニング 8.4	筋力トレーニング 11.1	筋力トレーニング 11.5	筋力トレーニング 12.2
6	釣り 9.6	ゴルフ(コース) 8.1	水泳 9.0	ゴルフ(コース) 9.0	ジョギング・ランニング 9.7
7	海水浴 9.5	水泳 7.5	海水浴 8.9	ジョギング・ランニング 8.5	ゴルフ(コース) 8.3
8	水泳 9.3	ゴルフ(練習場) 7.2	ゴルフ(コース) 8.7	釣り 8.0	ゴルフ(練習場) 8.0
9	ゴルフ(コース) 9.2	海水浴 6.9	キャッチボール 8.0	ゴルフ(練習場) 8.2	キャッチボール 7.5
10	ゴルフ(練習場) 8.1	キャッチボール 釣りに 6.8	サイクリング 7.9	キャッチボール 8.1	釣り 7.5

資料 「スポーツ白書2014」より当研究所にて加筆(年1回以上の実施率)

図表4 都道府県別運動・スポーツ実施率(10歳以上)

順位	都道府県	実施率(全体:%)	上位									
			1位	%	2位	%	3位	%	4位	%	5位	%
1	東京都	68.6	ウォーキング・軽い体操	38.7	サイクリング	15.4	水泳	14.3	登山・ハイキング	14.0	ボウリング	13.6
2	滋賀県	67.9	ウォーキング・軽い体操	37.3	ボウリング	16.7	水泳	12.0	器具を使ったトレーニング	10.3	ジョギング・マラソン	10.3
3	埼玉県	66.9	ウォーキング・軽い体操	37.9	ボウリング	13.3	登山・ハイキング	11.7	ジョギング・マラソン	11.5	水泳	11.5
4	神奈川県	66.1	ウォーキング・軽い体操	38.6	水泳	13.2	登山・ハイキング	12.6	ボウリング	12.1	器具を使ったトレーニング	11.5
5	千葉県	66.0	ウォーキング・軽い体操	39.0	ボウリング	12.1	水泳	11.7	器具を使ったトレーニング	10.5	ジョギング・マラソン	10.4
6	山梨県	65.2	ウォーキング・軽い体操	35.1	ボウリング	14.5	器具を使ったトレーニング	10.4	水泳	10.0	ゴルフ(練習場を含む)	9.6
7	愛知県	65.1	ウォーキング・軽い体操	35.0	ボウリング	15.9	水泳	12.5	ゴルフ(練習場を含む)	10.4	器具を使ったトレーニング	9.5
8	奈良県	64.5	ウォーキング・軽い体操	37.1	ボウリング	13.2	登山・ハイキング	13.0	水泳	10.2	器具を使ったトレーニング	9.6
	全国	63.0	ウォーキング・軽い体操	35.2	ボウリング	12.8	水泳	10.5	器具を使ったトレーニング	9.9	ジョギング・マラソン	9.6

資料 総務省 HP 社会生活基本調査(2011)より当研究所にて作成

傾向にある。種目別運動の推移をみると2010年以降、「水泳」や「海水浴」が10位以内から外れ、「ジョギング、ランニング」が2010年8.5%、2012

年9.7%と10位以内にランクインしている(図表3)。

3. 都道府県別のスポーツ実施率

都道府県別の運動・スポーツ実施状況（図表4）をみると、2011年の調査では、東京都が68.6%と最も高く、以下、滋賀県（67.9%）、埼玉県（66.9%）、神奈川県（66.1%）、千葉県（66.0%）の順となっている。

奈良県は、スポーツ実施率が64.5%と全国8位で、全国平均（63.0%）を上回っており、概ねスポーツに対して熱心で、健康に対する意識も高いことが伺える。

また全国の種目別の実施率をみると、最も行われている種目は「ウォーキング・軽い体操」（35.2%）で、順次「ボウリング」（12.8%）、「水泳」（10.5%）、「器具を使ったトレーニング」（9.9%）と続くが、「ジョギング、マラソン」（9.6%）は第5位にランクインしている。奈良県の「ジョギング、マラソン」は7.9%（第8位）で、奈良県のマラソン人気は比較的高い。

2007年に開催された東京マラソンをきっかけに市民ランナーが増加し、またウェアのファッション化が向上したことにより、女性ランナーも急増しており余暇活動におけるマラソン人口は今後も上位を占めると考えられる。

以下では、2010年に平城遷都1300年を記念して始まり、5回目の節目を迎えた「奈良マラソン」の概要を紹介する。

3 奈良マラソンの概要と大会運営

1. 奈良マラソンのイベントとして開催された「奈良RUN×2リレーマラソン」

まず奈良マラソンのイベントという位置づけで開催された第2回奈良RUN×2リレーマラソンを紹介する。

同大会は、スポーツに対する意識の高揚や体力

の向上を目指すとともに、地域間の交流を図り、誰もが、いつでもスポーツに取り組める環境をつくることを目的として始められた。会場は、橿原神宮の杜にある奈良県立橿原公苑で、幅広い世代が体力及びハンディキャップの如何を問わずに、誰もが気軽に参加出来るリレーマラソン大会として、2014年は、奈良マラソンに先立ち、11月30日に開催された。

大会には226チーム、1790人（20kmの部：77チーム、499人、42.195kmの部：149チーム、1291人）が参加し、橿原公苑の特設コース（1週1500m）を仲間とタスキをつないだ。



（左）号砲とともに一斉にスタート



（右）仲間の声援を背に受け、駆け出すランナーたち

地元奈良だけでなく、東京をはじめ県外からは72チームも参加し、飛鳥・藤原の宮都とその周辺の歴史的な名所など奈良の魅力に触れる貴重な機会となった。

20kmの部は、家族1組2人以上で参加できる「ファミリーの部」やチーム全員が小学生で組む「キッズの部」などがある他、42.195kmはチーム全員が同じ職場の「職場の部」、全員が女性の「レディースの部」、また全員が50歳以上の「マスターズの部」などもあり、チームワークの良さ、仲間の絆が際立った大会であった。

特にリレーマラソンは、陸上競技場内でタスキをつなぐため、スタンドで応援する声も自然と大きくなり、ランナーとの一体感が感じられた。ま

た大会当日は気温が20度近くまで上昇し、自ずと選手のボルテージも上がった。



ゴールを目指し力走するランナー

レースは、各人のレベルに応じ、何度でも記録に挑戦できる競技性も兼ね備えており、多世代にわたり多くのランナーが楽しめるのも、リレーマラソンの醍醐味である。周年コースではあるが、ボランティア66名が大会を支え、医療救護班は奈良県立医大の協力も得て、スタッフは万全な状態で控えていた。競技場入口には「にぎわいブースエリア」を設け、「グルメ屋台」、「スポーツグッズの販売」の他、「奈良マラソンPRブース」などが出店し、賑わいをみせていた。またタレントでアスリートでもある森脇健児氏と森脇健児陸上競技部女子部による楽しいトーク&ランなどが大会を盛り上げた。

この大会は、マラソンのビギナーのみならず、ベテランまでが、スポーツの楽しさを再認識できたであろうし、なかには奈良マラソンへの挑戦を目標にするランナーが出てくるなど、「誰もがいつでもスポーツに取組める環境づくり」という目標を十分に達成していると感じた。

2. 世界遺産を駆け抜ける奈良マラソン

(1) 奈良マラソンの概要

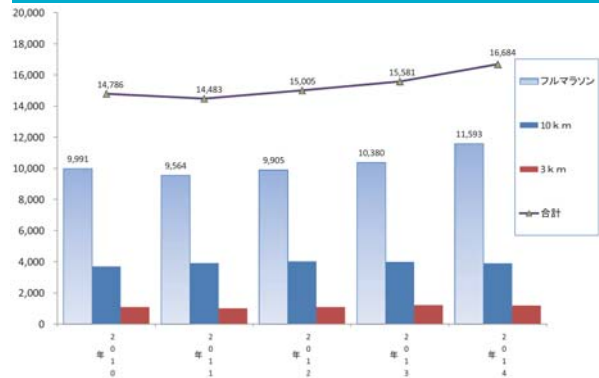
2010年に奈良の都・平城遷都1300年を記念して始まった奈良マラソンも、今年で第5回目を迎えた。昨年12月に開催された「奈良マラソン2014」は、奈良県民枠としてフルマラソン(42.195km)で定員を2,000人増加。全国、海外からフルマラソンの部13,031人、10kmの部4,526人、3kmジョギングの部1,308人の合計18,865人がエントリーした。

レースは、各人のレベルに応じ、何度でも記録に挑戦できる競技性も兼ね備えており、多世代にわたり多くのランナー

が楽しめるのも、リレーマラソンの醍醐味である。

フルマラソンに実際に出走したランナーは11,593人で、第1回の9,991人に比べ1,602人増加。また10kmと3kmを含めると合計16,684人のランナーが、冬晴れの古都・大和路を駆け抜けた(図表5)。

図表5 奈良マラソン出走者の推移



資料 奈良マラソン大会結果より当研究所にて作成
ただし、2012年以降廃止された5km種目の出走者を除く

大会の魅力は、20年に1度の式年造替が今年本格化する春日大社、平城遷都1300年祭のメイン会場であった平城宮跡、奈良の大仏で有名な東大寺などの世界遺産、奈良公園で遊ぶ鹿など古都奈良の風景を存分に味わえる多彩なコースに加え、途切れることのない沿道の人達による熱い応援だ。



(左) スタートの合図とともに元気よく飛び出すランナー

(下) 11,593人のランナーが冬の和和路へ



コース全体で、約16,000人が心のこもった「奈良のおもてなし」としてランナーたちに声援を送った。

沿道からは温かい声援だけでなく、頑張るランナーに水やチョコレートを差し出す人達もいた。

完走したランナーからは「天理や白川の橋など

傾斜があって起伏に富み、最後に鴻ノ池の坂があって、本当にきついコースだが、沿道の応援が温かく、また途切れることなく続くので、気持ちよく走れた」「鹿がコースに入ってくるなど、奈良らしさを堪能でき楽しかった」「膝も太腿も自分の足で無い感じでのなか、最後まで完走できたのは、沿道の声援のおかげ」などの声もあり、拍手、声援が持てる力を振り絞るランナーを後押しした。

この大会では、長距離を駆け抜けるランナーのためにコースに用意した給水用紙コップは約 240,000 個、バナナは約 30,000 本。特にマラソン種目で提供している「ぜんざい」や「三輪そうめん」の振る舞いは、奈良マラソンの名物となっている。他にも「和太鼓の演奏」や「バサラ踊り」など地元の心づくしの歓迎で全国のランナーを励ました。また、スペシャルゲストのバルセロナ五輪女子マラソン銀メダリストの有森裕子さんもランナーたちに声援を送った。



出走するランナーにスタート地点で声援を送る大会会長の荒井知事、大会副会長の仲川奈良市長と並河天理市長、スペシャルゲストの有森さんや奈良県出身のタレントたち

さらにメイン会場の奈良鴻ノ池運動公園では、12月13日・14日の2日間、「奈良マラソンEXPO 2014」と題して、奈良が誇る観光や特産品、グルメやスポーツ用品の即売など一大イベントコーナーが出現し、2日間で100,000人近くの来場者が楽しんだ。また、せんとかんをはじめ、奈良を代表

するマスコットキャラクターも集結し、大きな盛り上がりを見せた。



(左) オープニングイベントの「奈良のご当地キャラクター祭り」に集合したマスコットキャラクターたち



(右) 選手宣誓と、ゆるキャラグランプリ2014で11位に入った雪丸

このほか大会開催にあたっては、「奈良マラソン2014」のガイドブックを持参すれば、奈良駅周辺の飲食店や土産品の購入などを割引価格で利用できるキャンペーンを実施するなど、奈良のまちあげての大会となっている。



(左) 「奈良マラソンEXPO 2014」の会場入り口



(右) せんとかん達のダンスパフォーマンス

また当日は、第47回衆議院議員総選挙の投票日と重なったことから、当初男子の更衣・手荷物預かり所に予定されていた体育館施設が開票所となり、直前に変更を強いられた面もあったが、大きなトラブルもなく、またランナーにストレスをかけることなく競技が開催された。主催者のきめ細かなサービスと機能的な運営体制が功を奏した。

(2) 大会を支える

ボランティア

マラソンイベントの開催が全国で広がる中で、その大会を支えているボランティアの存在は、それぞれの大会において必要不可欠である。開催されるイベントの成否は、ボランティアの活躍が大きく影響を与えている。大会規模に応じて、ボランティア数は4,000~1万人に達し、その募集形態も、個人、団体、ファミリーなど、複数のカテゴリーが設定されている。

マラソン大会の運営を支えるボランティアは、救護スタッフ、給水ボランティアをはじめ、観戦者がコースに出ないように監視する沿道サポーターなど、その仕事はさまざまである。沿道サポーターは、観戦者の監視のみならずランナーへ積極的に声援を送る役割も担う。

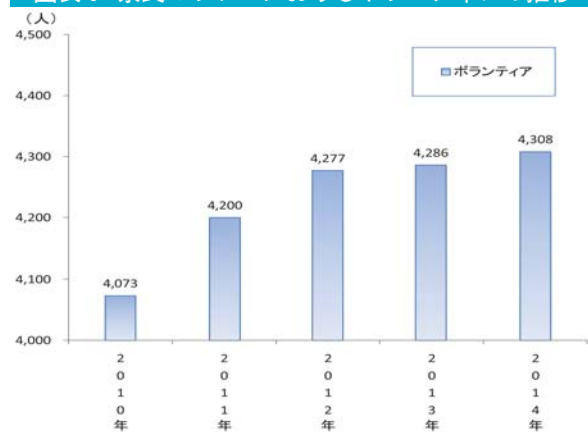
奈良マラソン2014では、4,308人のボランティアが、沿道整理や給水、受付などで大会を支えた。地域全体でマラソン大会を盛り上げるためにも、ボランティアは欠かすことのできない存在で、その確保は大会の成功を左右すると考えられる。



(上) 会場の鴻ノ池陸上競技場入口

(上) フルマラソンと3kmジョギングのコースマップ

図表6 奈良マラソンにおけるボランティアの推移



資料 奈良マラソン実行委員会の大会結果より当研究所にて作成

4 今後の大会運営の課題（まとめ）

奈良マラソンのプレイベントと位置づけられている奈良RUN^{らんらん}×²リレーマラソンは、ベテランからビギナーまで楽しめる大会で、中には奈良マラソンへの挑戦を目指すランナーも出てくるなど、マラソン人口の普及が期待できる大会であり、今後も連携を深める意義がある。

奈良マラソンは、「古都奈良の文化財」として世界遺産にも登録されている平城宮跡や東大寺、興福寺、春日大社といった全国有数の歴史的景観や、奈良公園などの素晴らしいロケーションを味わえるコースが特徴で、奈良の魅力を体感できる大会としてランナーからも好評を博している。

今回は、第5回目の節目を迎え記念大会としてフルマラソンの参加枠を2,000人増員し、12,000人のうち11,000人をインターネットで募集したところ、一般受付枠9,000人は30分で、県内枠2,000人は8分で、昨年よりさらに早く締切りとなるなど、人気のあるマラソン大会となっている。

また海外ランナーのエントリーは、第3回から募集を始め、最初は52人であったが、今回はアメリカ・アジア・ヨーロッパなどからエントリー数が200人を超えるなど、世界からも注目される大会となっている。

地域活性化策としてマラソン大会の開催は、有意義であるといえるが、各地で行われているマラソン大会の現状を踏まえ、効果的な開催を継続するための課題を以下に考察する。

1. 効果的・継続的な開催を目指して

（1）女性ランナーの参加が多いほど期待できる消費

「東京マラソン」開催以降、マラソンは身近な存在となり、特に女性ランナーが急増している。

ウェアも充実しファッションも楽しめることから「美ジョガー」と呼ばれる30代前後の若い女性ランナーが増えており、今後も増加が見込める。

女性ランナーは、男性よりウェアなどマラソン関連商品にお金をかける傾向があり、また男性に比べ宿泊費を支出することに抵抗がなく、観光地の大会へも旅行を兼ねて参加する傾向がある。そのため女性ランナーの参加が多いほど、地元への経済効果が期待できると考えられる。

一方、多くの男性ランナーは、日帰りで参加できるマラソン大会を選ぶ傾向があり、宿泊による消費が、期待するほど効果がない大会もある。

（2）海外ランナーからのエントリー拡大

参加者制限などの限界もあるが、海外枠を創設し、台湾・香港・中国などにPRするのも効果がある。円安による割安感が出た日本製品に魅力を感じる訪日客は増え、地方にも足を伸ばす人が増えている。

特に昨年10月に単価の低い食料品や化粧品も免税対象となり、訪日外国人の消費は今後一段と期待できる。また「日本の食事は美味しい」という外国人も多く、観光を兼ねたランナーとその関係者を奈良に招きたい。この大会を奈良の地域、スポーツ振興につなげていくため、観光施策や観光団体との連携を図るなど、地域とのリレーションをさらに深める施策を講じたい。

（3）観戦者やボランティア等を含めた満足度の向上

「奈良マラソンEXPO」のイベントコーナーでは、スポーツ以外のイベントを併せて実施したり、全国へのテレビ放映などを通じ地域情報の発信につなげたい。例えば、マラソンに興味のない人も巻き込めるよう、音楽フェスティバル等、スポーツ以外のイベントを共催するなど地域の誰もが参加できる機会を提供できる場に広げてもおもしろい。

ボランティアへの取り組みとして、ある市民マラソンでは、大会終了後に「ボランティア感謝祭」を開催するなど、ボランティア同士の交流を深める機会を提供している。さらに地域で活躍する「スポーツボランティア（スポーツイベントに関わるボランティア）」を紹介するスポーツボランティア情報誌を発行し、ボランティアの普及活動にも力を入れている。大会を継続する上でも、ボランティアのモチベーションを高める策も積極的に考える必要がある。

（４）他のマラソン大会との連携

奈良マラソンは、レベルの高い市民ランナーだけが参加する大会ではなく、趣味と健康を兼ね備えた誰もが参加できる大会であり、すそ野は広い。

また奈良マラソンのプレイベントと位置づけられている奈良RUN^らN^ん×²リレーマラソンは、ベテランからビギナーまで楽しめる大会で、中には奈良マラソンへの挑戦を目指すランナーも出てくるなど、マラソン人口の普及が期待できる大会であり、今後も連携を深めていきたい。

ただフルマラソンに参加しているランナーは、各大会参加や練習を重ねるうちに自分自身の走ったタイム、記録に挑戦するといったシリアスな市民ランナーになる傾向がある。そのためフルマラソンより長い「ウルトラマラソン」や道路ではなく山道を走る「トレイルランニング」といったより高いレベルのマラソンに参加するランナーも現れる。

特にランニング人口とマラソン大会の増加を背景に、多様な志向や高いレベルでの自己挑戦の場を求めて、より負荷の高い「トレイルランニング」に参加するランナーは多い。この競技は、都市部から離れた交通量の少ない場所で実施されるため、交通規制が必要なケースが少ない。また普通のマラソン大会より長時間を要するため、ランナーの

宿泊を見込めるマラソン大会といえる。奈良の山間の古道を利用するなど「奈良マラソン」の次の一手として開催するものひとつである。

一方で、山地や丘陵地などの自然環境の中で開催する競技であるため、野生動物などへの配慮や、けが等、危険への十分な配慮が必要である。また山間では登山者との共存、ボランティアの確保なども課題となる。

（５）全国から集うランナーに対し奈良の魅力発信

現在最古の歴史書とされる「古事記」が完成して2012年で1300年を迎え、また2020年には「日本書紀」が完成して1300年にあたる。奈良県ではこれらの文献をはじめ、本県特有の歴史素材を効果的に活用しようと「記紀・万葉プロジェクト」に取り組んでおり、マラソン大会への参加を機に奈良の豊かな歴史、文化に親しんでもらい、奈良の魅力を感じてもらいたい。海外からのエントリー数も、235人（2014年）と増加しており、インバウンド強化の一環として参加者・観戦者に対し、周辺観光地への誘導、取り組みへの強化を図りたい。

奈良マラソンの開催は12月のオフシーズンであり、またクリスマスやお正月前の開催ではあるが、奈良の魅力を発信できる絶好の機会と捉え、装飾やブースイベントの出店や旅行雑誌等への大会情報の掲載など、さらなる盛り上がりにつなげたい。

スポーツは人を育て、人と人とを結び、またまちづくりや地域の活性化につながる可能性を持つ。奈良マラソンが回を重ねる度に、奈良を活気づける拠所となることを期待する。（橋本公秀）

【参考文献】

「2014 レジャー白書」 公益法人 日本生産性本部
「スポーツ白書2014」 笹川スポーツ財団
「社会生活基本調査（2011）HP」 総務省
「奈良マラソン2014 OFFICIAL PROGRAM」
「奈良マラソン2014 ガイドブック」 奈良マラソン実行委員会
「奈良マラソン2014 HP」 奈良マラソン実行委員会